

サントル運河のボートリフト

土木遺産として生かし続けるために

倉田 雅人

KURATA Masato
株式会社 オリエンタルコンサルタンツ / 東京事業本部 / 構造景観G / 技術主幹



サントル運河の4基のボートリフト

サントル運河(Centre Canal)は、ムーズ川とエスコール川のそれぞれのドックを連結するために作られた運河である。しかし、その途中の街ドゥルーでは、地形に67mの高低差がある。この高低差を解消し、この区間にも船船を運航させ、ドイツからフランスへの直通幹線を実現するために4つのボートリフトが建設された。

これらのボートリフトは、稼働中のボートリフトとしては建設当初から世界唯一のものである。4つのボートリフトは、パリの万国博覧会が開催された1年前の1888年から1917年の間に建設され、現在もその設備、機械室などがほぼ建設当時のものそのままに活用され続けている。

このボートリフトは、ヨーロッパ19世紀の運河建設、水運発達の1つの頂点を示す建造物である。毎年4万人

程度の人々が訪れている土木遺産であり、世界遺産としての登録対象は、これら4基のボートリフトとそれを含む周辺の橋梁、付属建築物などの関係施設が含まれたラ・ルヴィエール、ル・ルーの敷地全体となっている。

土木遺産と維持管理

現在、ボートリフトの稼働は、維持補修および観光用ライトアップ工事のため止められており、実際にボートリフトが稼働した姿を見ることは出来ない。ボートリフトは、地形の高低差とその水を利用した水圧を活用しシリンダー式のピストンを上下させる構造となっている。材料は鋳鉄を基本として鋼を加え、じん性を高めるなどの工夫を行い当時の技術を結集し建設されたことが伺える。

ポンプ室の管理担当にあたるレオポルト氏に話を伺ったが、機械の維持管理には、現在でも手作りのパッキンを用いるなど、技術者と職人の両役をこなしながら、ボートリフトの管理に励んでいる。今後のボートリフトの管理についてコンピューター等の利用が考えられないかを聞いた際、かれは、こういった。「コンピューターは俺の頭の中にあるよ。これまで、人の手で管理し続けてきたのだから、これからもコンピューターなどの力を借りる必要はない。」さらに「俺にとってこのリフトは2番目の女房みたいに愛着がある。」と語りボートリフトを守り、動かしていることへの誇りと自信がみなぎっていた。このような頑固な職人氣質の技術者が昔ながらの風景とその技術を伝えていくのであろうとも感じとれた。



写真1 - ボートリフトNo.3とポンプ室



写真2 - 閑静な中にたたずむボートリフトNo.2

これからのボートリフト

4基のボートリフトは、これまでの商用から観光施設として生まれ変わろうとしている。そのため、これらの施設を維持し続けるためには、建設当時の技術を延々と受け継いでいく必要があるが、レオポルト氏の引退後、管理する人間は決定していない様であった。これらの世界遺産は、建設当時の姿を残し活用していくために

様々な技術が要求され、修繕等に対する費用と時間、人材が必要となる。このため国としても観光施設としての成功を果たすべく活動している様子である。

(写真: 1、6、初芝成應 2、塚本敏行 他、筆者)
(協力: ベルギー観光局、ベルギー建設省)

参考資料
1) Un géant funiculaire sur le canal du Centre. L'ascenseur à bateaux de Strépy-Thieu



写真3 - ポンプ室設備の説明を行うレオポルト氏



写真4 - 現在でも手作りで作られる皮のパッキン



写真5 - ライトアップされたボートリフトNo.4



写真6 - 船舶の航行にあわせ回転する回転橋